

OPINION オピニオン・スライス SLICE

柔道家／オリンピック・メダリスト

松本 薫さん

——ロンドン五輪の金メダルに続き、リオ五輪での銅メダル獲得、おめでとうございます。

ありがとうございます。

——それにしてもリオ五輪での準決勝は、残念でした。始まって24秒で、モンゴルの選手に一本取られてしまいました。

本当にあっという間でした。

——東京五輪を目指す可能性もあるというニュースをお聞きしました。やはり悔しかったからですか。

そうですね。「悔しかったから」が一番ですね。リオで優勝していたら、多分満足してやめていたと思います。でも次の五

輪が東京で開催されるのも大きな理由です。2020年には、アスリート界では高齢な部類の32歳になるので、海外まで行って試合をするのは体に結構な負担なんですけど、東京ということになると、「いいね、やりやすいね、私やれるかな」と思いました。——リオ五輪での3位決定戦はきっちり勝たれました。その前の試合から、どう切りかえたんですか。

実は、その前の準々決勝が一番の山場だったんです（注：フランスのパビア選手。8分以上の長時間に及ぶ試合だったが延長戦にて技ありで勝利）。彼女はジュニア時代から戦っている選手で、一番強く、しかも一番相性が悪かったので、彼女に勝てばほぼ優勝確定だったんです。その試合に勝ったので「もう大丈夫だ」と油断してしまって、次の準決勝で負けてしまいました。金メダルという目標が、目の前から崩れ落ちて、同時に、いろいろなプレッシャーも一緒に崩れ落ちました。日本柔道の威信をかけたリオ五輪で、私が最年長で前大会唯一の金メダリストで、私がみんなを引っ張らなくちゃいけないとか、それまでに抱えていた色々なプレッシャーとか思いとか、重たいランドセルをやっと外せたみたいなの。

——準々決勝から準決勝までの時間は45分だったそうですが、短

究極の状況で、
自分を支えてくれる
人たちとのつながりが見えた

Interview with
Kaori Matsumoto



い時間でよく切り替えられましたね。

負けた瞬間は「終わった」と思ったんです。でも、礼をして、畳を歩いて、その畳からおりる瞬間、もう、明らかに応援席の音がしゅんとなっているのが分かるんですよ。日本の旗がしおれてるんですよ。「頑張れー！」ってぴんぴんだった旗が、しおーんって。両親も会社の方も応援に来てくれていて、さっきまで「頑張れ！松本、いいぞー！」って言ってくれていたのが、みんな「はあ…」って暗い顔で下を向いていて…。わざわざリオまで来てもらっているのに、もう一回負けたらもうかける言葉もなくなる、このまま24時間も日本に帰る飛行機に乘せられない、私も終われないという思いで、最後はみんなで笑顔になりたいなと。本当にそれだけで、畳をおりるときにはもう切り替えができていました。

——お強いんですね。

いや、しおーんを見たら、誰でも切りかわると思います。

——支えてくれる人たちが切りかえのパワーだったのですね。

そうですね。そのために、最後は本当の孤独になりました。それまでは、色々なプレッシャーもありましたし、声援を力にするというのもあったって応援の声もすごく聞こえていましたが、全てをばさっと切りました。応援してくれている皆さんとの本当のつながり、「絆」が見えたんです。「思いで伝わる」と分かったので、「聞こえなくていいや」と思いました。みんな、私を信頼してくれている、最後は勝つと信じてくれている、それだけでいいと思って、最後は全ての音を切りました。監督の声も無視したんですよ。でも、監督も私が勝つと信頼してくれていて、私が自分の世界に入った瞬間に、何も触れずに、「わかった、おまえの好きにしろ」と。そのときは本当に素の自分で、素の松本薫でやっと自由に畳に上がったという感じでした。

——そして、3位決定戦は見事勝利。

一番自分らしい戦いでした。試合までの積み重ねがあって、本当に練習をやり込んで、誰よりも練習して、誰よりも頭を

使って、試合のある1日にピークを合わせて、その最後に自分を本当に信じられた瞬間でした。

——練習というと、松本さんは夜中に山を走るとか？

はい、走ります。すごい怖いですよ。街灯のない山は本当に真っ暗で。

——ヘッドライトもつけずに走るんですか。

つけずに走ります。私、見えないんですけど、本当に幽霊とか怖くて、本当に五感を研ぎ澄ませて戦闘モードで走ります。何かがカサッと鳴っても、風なら大丈夫だし、動物とか天狗ならまだ勝てるからいいんですけど、早朝におじいちゃんがライトもつけずにゆっくり歩いてるときは、何かわからなくて怖いです。カサッ、カサッって、前に何かいるんです。きっと向こうも、後ろから「タッタタッタ」って何かが近づいてくるから、お互いにすごい緊張感でどきどきしながら行くんですが、走っているうちに、おじいちゃんだと分かるので、なるべく高い声で「おはようございます！」と言うと、おじいちゃんは女だと分かって安心して「わ、女か。」って言うんです。これ怖いですね。

——トレーニング内容はご自分で決めるのですか。

はい、フィーリングで。長期間休んで、柔道に復帰するぞとなったら、まず海に行って裸足で砂浜を走って、足の指で砂をつかんで走る、土台をつくる、そういうところから始めます。人に聞くよりも体によく問いかけたら、体が、一番何が欲しいか答えてくれます。勉強とかも、自分に何が足りないか、伸びているものがあるかとか考えてわかるから勉強しますよね。私、あまのじゃくなんで、やれと言われたらノー、やるなと言われたらやりますになるんですよ。だから、自分で決めるのが私の性格には一番合っています。

——小さいときからそうなんですか。

中学生まではずっと先生に言われたとおりにやっていました。高校生でやっと自我が芽生えて、東京に来てひとり立ち

をして、そこから自分で考えるようになりました。「私の柔道って何だろう」って、まずそこを素直に考えました。それまでは、道場の先生が結構厳しかったので言われたとおりしなと怒られるし、言われたとおりしていれば勝てたんです。でも、その先生がいなくなって、いざ自分で立とうと思ったときに「あれ?試合の入ってどうだっけ」と疑問に思って、そこから一つ一つ、私の柔道を見つけていきました。

——やっぱり天才なんですかね。

いや、私は天才じゃないです。5人兄(姉)弟のうち、上2人は頭がよくて、姉と弟が天才で、私は自分が劣っていると分かっていたので、少しでも天才になりたい、少しでもみんなに追いつきたいと思っていました。

——天才を盗むんですか。

いや、盗まないです。絶対にまねは嫌なんです。まねしたら、ここまでだろうなと。まねしたら、この人を超越することができないなと。もう、負けず嫌いですよね。負けず嫌いだっただからよかったんですけどね。

——話は変わるんですが、好きな言葉を教えてください。

私がよくサインに書く言葉は「感謝」です。なんでかといいますと、私、柔道が好きかといったら正直好きとは言えなくて、いつも柔道をやめたいと思っていて弱いんです。体がきつくなったりとか、もう嫌だ、こんなしんどい思いをしてまで何でもこんなにやらなきゃいけないんだろうと思ってしまうときもあって、そういうのをいつも踏みとどめてくれるのが、母を海外に連れていくという約束とか、父をリオに連れていくという言葉です。そして、父も母も私を助けてくれる。限界が来たときに逃げそうになる自分をとめてくれるのは、やっぱり人のつながりなので、そういうつながりに「感謝」なんです。

特に今回は思いがけず負けてしまって、でも、そのために皆さんに支えられている、つながっているということが分かったので、悔しいけどよかったなという思いもあります。

——法学部ご卒業ですね。

一応ですよ、一応。ドーピングの関係から薬について学ぶために薬学部に入れたかったんですが、薬学部には柔道部がなかったのもあって、興味のあった法学部を選びました。授業には、真面目に全部出ていました。簡単なのしか選ばないですよ、刑法、民法、憲法、当たり前の法律。民法が苦手です。「このときは、えーっと、どの条文だ?」って分からなくなっていました。スポーツクラブでは法学部の中で一番成績がよかったので「私、もしかして弁護士になれちゃう?」って軽く思ったことがあります。でも、司法試験を目指している人たちが、刑法の条文をすごく細かく言うのを聞いた瞬間に、私の頭じゃ無理だと思いました。受かるなんて、軽く思ってしまって本当にすみません。

——若い人に対して激励を頂きたいのですが。

私は、「みんな一緒」はよくないと思います。平等なんて絶対にあり得なくて、やっぱり誰かが上にいて、追いつきたい、

追いつきたい、その気持ちが多分一番大事だと思います。私も最初は何回も負けて、ほぼ負けた経験しかなかったもので、負けるたびに悔しい思いが強くて、だんだん強くなっていったので、もっと悔しがって欲しいです。横並びと一緒にいることは絶対楽しくないですよ。それはただ単に自分の可能性から逃げているだけです。自分のプライド、負けることへのプライド、傷つきたくないから多分横並びにいてだけで、もっと負けてもっと悔しがって欲しいなと思います。

——「野獣」と言われていますよね。

言われています。あれは訴えることはできるんですかね?

——ご自分としては不本意ですか?

今は気に入ってます。ロンドンが終わっていきなり野獣と言われたので、最初は「野獣じゃなくちゃいけない」と自分を作ってしまった、そのときは全然結果もよくなくて、やっぱり自然と出る野獣が一番強いんだなと思いました。

——ところで、緊張はしないですか。

すごく緊張します。試合の1カ月前から眠れなくなったり、食欲が落ちたり、体にぶつぶつができてきます。でも、緊張は「今から試合で戦うよ」という体のサインで、頭で考えなくても体が勝手に考えてくれる証拠なので、緊張した瞬間は「私は今から戦う準備ができているんだ」と思って、緊張できたことにちょっと安心します。だから、別に緊張は全然悪いことじゃない気がします。緊張して何もできないで終わるよりも、緊張しても全部出し切った方が絶対楽しいだろうなと思いますし、緊張しても何か一つだけでもいいから出そうというもっています。

どんなに練習しても、どんなに自信があっても、やっぱり緊張します。でも、いざ「はじめ」となったら緊張がとまります。やる前までが緊張するから、緊張の中で心をどれだけ整えていけるかですね。

——ロンドンが終わってからリオまでのプレッシャーはすごかったですよね。

そうですね。ロンドン五輪後、一時ずっと負けなしで、そのときは何も思わずに戦っているんですけど、何年か後に「勝率100%だった」と言われて知ったことがありました。意識してしまうと戦い方も変わってしまうので、あまり意識しないようにしました。

——東京五輪もプレッシャーがあるかもしれません。

そうですね、東京の方が大きそうですね。でも、プレッシャーって悪いことじゃないですものね。そのプレッシャーのおかげで本当にたくさんのことを学べるので、プレッシャーって結構いいものだと思います。しんどいですけど。

——ロンドンはお母さんとの約束、リオはお父さんとの約束でしたが、東京は旦那様との約束でしょうか?プレッシャーをかけて申し訳ありませんが、東京五輪も期待しております。本日はありがとうございました。

ありがとうございました。

(Interviewer: 寒川 智美
Photo: 高廣信之)